特別講演２

「漢方と免疫」

日高徳洲会病院院長

井齋　偉矢　先生

漢方薬の薬効を理解するには、新薬（漢方薬に対しての西洋薬を便宜的にこう呼ぶ）の作用機序を説明するのに用いられる現代薬理学とは違う薬理学を考えねばならない。新薬は合剤を除けば基本的に一種類の主成分からなり、それが体内でどのように代謝され、どこの作用点に作用して薬効を示すのかという説明方法が取られる。しかし、漢方薬には主成分というものは存在せず、その構成は、1 個 1 個は到底薬効を示すことができないほどの微量の数千種類（場合によっては一万種類以上）の化合物の集合体である。これらが一斉に体内に入って数千の作用点を刺激することにより、体からシステムを正常化するように働く response を引き出すことにより、結果として自力で不具合を正すように働く。あたかもニボルマブ（オプジーボ）の作用機序に類似する。そして、漢方薬は基本的に抗炎症薬なので、免疫系を正常化して感染症に対峙することが、その作用機序の基本になる。